

組織と人のプラットホームの役割を担う

成家 すでに今後の展望についてのお話があり、Park-PFI、SDGs、地球環境問題への対応など、対象分野が格段に広がる中で、協会や業界の発展について、さらにご助言をいただければと思います。

涌井 建設業の枠に捉われずによ話をしましたが、論語には「祖型忘れず」という言葉もあり、日造協も時代とともにある造園建設業であることを忘れてはなりません。

ただ、造園建設業という形で社会にアピールすると、我田引水だと思われてしまします。造園・環境緑化産業振興会のような組織がしっかりしていれば、例えば“公園マネジメント会議”など、市民などのステークホルダーが参加できる組織を我々が黒子になり、その仕組みや資金をつくり、市民のニーズを把握できるようにすること望ましい。我々の先輩たちは眼前の利を追うばかりではなく、そうした戦略性をも追求しました。

先のCOP26など、吸収源としてのみどりの存在が高まりを見せる中、造園には関係がないと言われる方もいるかもしれません、街路樹も都市公園の樹木も都市林のカテゴリーにあるわけで、そういったものに我々が貢献していることをアピールし、新しいライフスタイルを演出する舞台ともなる公園緑地の利用の効用を高める手段としての公民連携を大いに進め、市民と一体となってリバブルでウェルビーイングな環境づくりの運動体をつくるのも1つではないでしょうか。

そこでは日造協では言えないようなことも発信できると思いますし、我々はその果実を拾っていけばよい。各社や建設業という業界ではできない、あるいは耳を傾けてもらえないそうした領域に積極的に踏み込んでいく覚悟が大切なのではないでしょうか。

伊藤 涌井先生の発言に賛成です。この分野はものすごく工種が多く、量が少ないので、多工種を全部自分でやろうとすると不得手になってしまふかもしませんが、造園は指定建設業ですから、全部やろうとせずに、自分たちがプラットフォームになる考え方もあります。

日本建設業団体連合会、日本土木工業協会、建築業協会が2011年に(一社)日本建設業連合会と1つになりました。1つにまとまった方が外に対する力は強くなります。造園・環境緑化産業振興会は横の連携で1つの組織ではありません。関連団体のそれぞれの機能、役割をどう果たすかを見直すことも必要です。

そういうことをるために涌井先生や蓑茂先生がいらっしゃいますし、僕と同年代で活躍されてきた方々も皆いい歳になっていますが、それなりの経験、人脉とチャンネルがあります。

国際的な取り組みもAIPH以外にWorld Urban Parks Japanなど、多様な団体があり、頑張っておられる方がおられますし、これらを活用しない手はありません。国際連携に負担金を払い活用しないのはもったいない。もっと使いましょう。

蓑茂 これまでの50年は拡大する時代で、拡大は分化を伴い、設計、施工、さらに運動施設、公園施設、植木、水景など、拡大分化の流れだったと思います。

これによって、それぞれが先鋭化し、一定の成果があったと思いますが、この先これを突き進めて限界があるのではないかということが率直な思いです。

どこかで統合というワードを使いながら考えることが必要で、その一つが資格試験です。それぞれの分野の資格がありますが、レベルが大事になります。

建設キャリアアップでは、レベルを問うようになっています。例えば大学だと、昔は助手、講師、助教授、教授。今は助教、准教授、教授などの職位がありますが、これからは資格についてもこの職位の考え方が注目されるでしょう。建設キャリアアップでは、レベル4の日当はいくらなどときちんと示すような方向ですから、こういう職位を意識して、関連団体が共通のこととして取り組むといいと思います。

この先60周年、75周年などのタイミングが分かりませんが、そのときにどんな姿かを社会の情勢も考えながら、議論していく必要があると思います。

勉強会はいろいろなところで開かれていますが、“学び”“考え”で終わってしまいます。勉強して議論はしますが、行動に結びついていません。どんなことでもいいから、“学び”“考え”“行動する”をワンセットにして、いろんなことをされるといいと思います。

今、コンサルタントの方々と公園の樹木をどうするか検討しています。これもガイドラインやマニュアルを作るだけではダメで、どこか社会実験の場所を設定して、なるほど公園の樹木は植えるだけではなく、手入れをしてこそ素晴らしい風景ができると理解してもらわなければならぬと言っています。

また、専門職は大事ですが、最近は土壤と植物はもとより、複数に通じた多能職の時代になっており、そうならないと効率化、生産性の向上にはつながらず、働き方改革も実現できません。分化から統合、専門職から多能職、これらを踏まえて活動されるといいでしょう。

佐藤 皆さんのいう通りだと思います。気になるのは、会員の共通認識というか、同じ造園業として、会員企業が利益を上げていかなければならないときに、当初の日造協が建設業法や施策について、周知を図ったように、必要な情報を適切に共有できるといいと思っています。

新しい言葉がどんどん出てきて、SDGs、ダイバーシティ、スマートシティ、デジタル田園都市構想など、何のことかわからないものが多くなっています。

しかし、新たな社会や都市のあり方として提示されているのですから、そうした社会や都市において造園がどうなるのかを考える必要があります。

涌井先生が言った都市林、蓑茂先生の樹木管理についても、日造協の会員が、きちんと理解していることが大事で、だからこそ議論ができ、発注者が仕事を任せられる存在たり得ると思います。

造園学会の『ランドスケープ研究』には、3.11ポスト10年に関するものなど涌井先生と蓑茂先生がいろいろと考え方を示されています。造園の展開方法、方向性の示唆とも受け取れます。ぜひ、一読していただきたいと思います。

話がそれましたが、日造協には多くの会員がいて、新たな言葉や政策に自社で対応できるところと、そうでない方々がいらっしゃるので、広報などで適宜解説するのもいいでしょう。その時は、分かりやすい言葉と分かりやすい方法で進めて欲しいと思います。

全国技術委員会に出席された方の中には、大切な資料を持ち帰っても支部会員には伝わっていないという実態もあったようです。そういう残念なこともあったので、会員が一体となって取り組めるようにしていただきたい。

成家 せっかくですのでオンライン参加されているお二方はいかがですか。

鬼頭 貴重なお話を聞いておりました。仕事量や仕事の変化の話がありました。大都市と違ってローカルな県は少子高齢化も深刻で、大規模工事はどんどんなくなっています。観光が期待の一つですが、自然が目当ての方も多く、アウトドアメーカーの施設の集客力が高いです。

お城の話もその通りで、余り整備されていなかったところに人が来るようになり、そういったところの繁茂した樹木の手入れ、園路の確保などが仕事になっています。

木上 皆さんの言う通り、50年前は造園工事がなく、土木工事で仕事をしていました。それが造園工事になったことは画期的で、その後業界が成長し、50周年はちょうど変わり目なのではないかと思っています。ぜひ、先生方に素晴らしいヒントをいただければと思います。

和田 最近の日造協を振り返ると、資格制度や社会への発信も行っていますが、先行きに不安を感じるのは、これらの取り組みの将来像がはっきり見えないことにあるのではないかと思っています。

しかし、涌井先生がおっしゃられていたように、緑に関しては追い風が吹いており、我々はアイデンティティを失わずに、緑の重要性を伝えていくことが今一番大切で、2027年に横浜で開催される国際園芸博が今後の造園にとって非常に意義のあるものになると思っています。

涌井 バイオフィリックデザインが世界に浸透してきています。デジタル社会になり、デジタル疲れを起こし、アナログやリアルだったり、シームレスなものへの憧憬が非常に強くなるからです。パソコンに向かって仕事をしていると、目だけでなく、心も疲れてくるんです。それで自然や緑に触れたいという要求が高まります。

GAFAの本社には、どこも植物園かと思うほどの緑があります。そういう意味では、デジタル化すればするほど、鬼頭さんのお話にあった自然を求めての観光など、造園が携わる空間への欲求が高まるということを私たちがチャンスとして捉えていくことが欠かせません。

佐藤 デジタル化やAIなどは、私たち一般人が便利だと感じる以上に技術が進歩し、生活者の心理と乖離してしまっている部分があり、それがストレスになっていることもあります。

そこに涌井先生がおっしゃるような造園の出番があるのかもしれませんし、さっき言った新しい言葉もそうですが、これらに対して造園がどういう提案をしていくか、していかれるかが大事で、仕掛けていく必要があると思います。

蓑茂 先日山形に行ったときに草木塔を見ました。あいうものがバイオフィリックデザインなどに関係してくるのではないかと思いました。草木塔のいわれは諸説ありますが、米沢藩の江戸屋敷が焼失し、8年後に米沢で大火があり、建て直しのために多くの木を伐採したことから、草木に感謝し成長を願ってつくられたそうです。日本には食事の際に「いただきます」という文化がありますが、そうした関係もあるでしょう。



和田 新也 会長

バイオフィリックデザインにも関心を持って、社屋と圃場があるなら、圃場の中に社屋があるのもいい。だいぶ前から造園界では、圃場を活用した植物園構想などもやってきましたが、そういうことをもっとやっていくといいですね。

もう一つは、伊藤さんが言われていますが、政策支援により協会は支えられ頑張ってきたのだと思います。政策支援と両輪になるのは各社の企業努力です。造園業界の企業努力はどのように生みだされるのかということを、50年を機に考えてみるのもいいのではないかと思います。

日造協の地域リーダーズは、企業の枠を超えて、やがて経営に携わる若手の育成、経営資源を育む取り組みと理解しております。とても共感を覚えます。一人で悶々と考えてもいい発想は出ません。お互いを刺激しあうことによって育めるものなので、大切な活動だと思います。

伊藤 これまでの話から、枠を超えるということが大事だと感じました。

また、プラットフォームの話もありますが、プラットフォームには、組織と個人の2つがあると思います。

オンラインによる会議がコロナ禍で普及しましたが、大変な仕事、新たな仕事をすることになったら、人間性が大事で、あの人は何を考えているかわからないということでは、おつかなくて仕事になりません。人としての付き合いなしにいい仕事はできないと思っています。

そういう人間のプラットフォームには、官の人の参加も欠かせないと私はいますが、こそそやつたらダメで、きちんとした組織をつくり正々堂々とやることが大事です。日本造園修景協会が毎年、造園界の新年会を行っているのもこうしたプラットフォームとしての役割ですが、力のある日造協ならもっといろいろなことができると思います。

最後に一言ですが、都市公園整備費の記録を見たら私が現役の最後の時が一番大きく、日造協の会員数もピークになりました。都市公園整備費が減り、日造協も2世代目、3世代目になりましたが、日造協とともにあった50年で大変感謝しています。ありがとうございます。

令和4年は寅年。虎は一日千里を走るといわれます。組織と人のプラットフォーム、2027年の国際園芸博、海外の日本庭園など、いずれも日造協なしにはできないことです。日造協も虎の勢いで頑張っていただきたいと思います。

和田 今後の展開についてもご意見を賜りました。意見として終わらせず、実行に移していくことを思っています。

成家 お聞きしたいことはまだありますが、時間が尽きました。長時間、貴重なお話をありがとうございました。